『メサイア』に流れる“ハレの精神”

澤谷 夏樹

女王も介入する独英論争

「ジョージ・フリデリク・ハンデル（註：ヘンデルの英語読み）の生誕地ハレで、2009年のハンデル音楽祭が催されるに際し、パトロンの1人として関係者一同にご挨拶を申し上げる。今年の音楽祭が、職業人生の大半をロンドンで過ごし、代表作のほとんどをその地で書き上げたハンデルの歿後250年を祝うのは、注目に値する。私はハンデル音楽祭の成功を祈っている。音楽家にも聴衆にも、この音楽祭が喜びと楽しみを与えるものと確信する。エリザベス」（『ヘンデル音楽祭2009公式プログラム』9頁、ドイツ・ハレ、2009年）

ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル（1685〜1759）の故郷、ドイツ中部のハレ市は作曲家の事績を讃え、1922年からヘンデル音楽祭を催している。2009年はヘンデルの遠忌を記念する重要な年。例年より賑々しいこの年の音楽祭に、英国のエリザベス女王（当時）がメッセージを寄せた。女王が生誕地でのフェスティヴァルに「職業人生の大半をロンドンで過ごし、代表作のほとんどをその地で書き上げたハンデル」と書いて送り、この偉大な作曲家の独英帰属問題を蒸し返しているのは、まことに興味深いことだ。

ヘンデルはドイツに生まれ（1685年）、国内とイタリアとで修行を重ね（〜1710年）、故国北部のハノーファーで仕事を得た後（〜1713年）、本格的にイギリスに渡り創作活動を展開し、1727年には同国に帰化して、59年にロンドンで亡くなった。こうした経緯もあり、以前から、ヘンデル／ハンデルはドイツ人だイギリス人だと、喧しく議論されてきた。女王はイギリスを代表して「ハンデルは英国の作曲家である」と宣い、ハレ側に釘を刺す。ドイツでの音楽祭に対する祝辞であるにもかかわらず、だ。

焦点を『メサイア』に絞っても、独英の綱引きは存在する。ヘンデルが『メサイア』を初演したのは1742年。台本はイギリス人のチャールズ・ジェネンズ（1700〜73）が、欽定訳聖書（1611年）を用いて英語で書き上げた。イギリスに帰化して15年の作曲家が、英語の台本に付曲し、同地で初演したわけで、『メサイア』は議論の余地なく「英国産」と言ってよい。ところがこの作品には、間違いなくドイツ・ハレの血が流れている。正確に言うと『メサイア』は、台本の構成にヘンデルの三つ子の魂が共鳴して生まれたオラトリオである。

『メサイア』作曲の経緯と、その音楽

1741年夏、ヘンデルは失意の底に沈んでいた。前年のオペラ／オラトリオ・シーズンを大失敗で終え、歌劇興行から撤退。作曲家は次の目標を見失う。そこに手を差し伸べたのが、旧知の台本作家、先述のジェネンズである。「私が彼（ヘンデル）のために書いた、聖句に基づく台本に彼が曲をつけ（中略）才能と高度な技能のすべてを傾けるように願っている」と記した通り、ジェネンズは落ち込むヘンデルに『メサイア』の台本を手渡す。それが同年7月ごろ。時を同じくして、アイルランドのダブリンで演奏会を催すようにとの依頼が舞い込んだ。ヘンデルは8月下旬、『メサイア』への付曲を本格的に始め、9月中旬までのおよそ3週間でこの稀代のオラトリオを書き上げた。

ダブリンへの楽旅は11月から。英語のオラトリオを中心に作品を携行し、それらを歓迎の内に上演することに成功する。それを見たヘンデルは満を持して『メサイア』を舞台にかけた。1742年4月13日のことだ。ここでも賞賛の声を集め、意気消沈していた作曲家は完全に息を吹き返す。

翌年のロンドン初演の後、ヘンデルは1750年から天に帰る59年まで毎年、孤児養育院礼拝堂での慈善演奏会のために『メサイア』を上演し続ける。こうした上演ごとに作曲家は、楽譜を書き換えた。そのため、演奏に際してはそれらの中から、ふさわしい形を選ばなければならない。本日の演奏は、1753年のコヴェント・ガーデンにおける上演の形に範をとっている。

ヘンデルは「救世主来臨の預言から、イエスの生誕」および「イエスの生涯、その死と復活」の2群からなる物語を、3部構成の音楽で描き出す。第1部から第2部への変わり目では、イエスの生涯が続くように、第2部から第3部への移行では、復活の喜びとそれに対する讃美とが継続するように工夫している。

一方、視点をミクロにすると、第3曲「全ての谷は」に見られるように作曲家は、音画技法（音型でさまざまな現象を表現すること）によって、たとえば高い音域で山の高さを、低い音域で地の低さを、ジグザグの音型で道の凸凹を表現したりする。

このように、大小さまざまな手練手管でもってヘンデルは、聖書の言葉を生き生きと聴き手の耳に届け、（その聴き手にとってはもはや当たり前の）イエスの救世譚に、新たな感興を付け加えることに成功した。

『メサイア』の基層に見え隠れするルターの姿

ジェネンズの優れた台本が、ヘンデルをしてこのように生気あふれる音楽を書かせたことに間違いはない。問題は作曲家が、台本のどの部分に深く心を動かされたのか、

という点だ。それはおそらく、ジェネンズがキリストの受難を表すのに四福音書を用いず、旧約聖書『イザヤ書』第53章と同『詩編』第22編を引用したところにある。

当該の引用は、第2部の第20曲から第28曲、すなわちイエスの受けた嘲りと十字架上の死を象徴的に表す場面にあたる。受難を語るのに『イザヤ書』第53章を重用するのは、マルティン・ルター（1483〜1546）が1519年の受難説教でおこなったことであり、そのルターと共に宗教改革に邁進したヨハン・ブーゲンハーゲン（1485〜1558）が1530年の著作に書いたことでもある。その後、ルター派の各地域においては、『イザヤ書』第53章をもってキリストの受難を想起することが、内面化されていく。たとえば、ザクセン選帝侯国内では、受難日の礼拝で同第53章と『詩編』第22編を朗読するように定められた。

ヘンデルはルター派の牙城ともいうべき街ハレで生まれた。ここで復活祭を迎えるたび、幼いヘンデルの耳に響いたのは、『イザヤ書』第53章と『詩編』第22編の朗読、およびそれらを元にした受難説教であろう。

台本作家のジェネンズは、英国国教会の習慣に従って聖書の当該箇所を引用した（カトリックにも同様の習慣がある）。一方で、もともとそういった神学や典礼とは異なる政治的な意図（スチュワート朝の復興を目論むジャコバイトとしての立場）を絡めて、このように台本を書いたともいわれる。しかし、結果として『メサイア』の受難記事は、ルター派の伝統にどっぷり浸かったものと同様の仕上がりになった。それにより、ヘンデルの古い記憶が呼び覚まされたとしても不思議ではない。

「私は知っている」——敬虔主義の告白

もうひとつ注目したいのは、第3部冒頭のアリアだ。ソプラノが「私は知っている、私を贖う方が生きておられ」と歌う。「私」を主語にして「復活のメシアが生きている」ことを宣言し、「私も同じように死者の中から甦ることができる」とするのだ。

作品中もっとも興趣の深いアリアのひとつだが、ここに音楽上の深みが生じるのも、ヘンデルの生まれ故郷ハレのおかげかもしれない。この街は単にルター派を信奉していたに留まらず、その正統主義に対して信仰覚醒を促す、敬虔主義運動の中心地だった。敬虔主義は、「私（キリスト者ひとりひとり）」が「回心」を通して「新生と聖化」をなすことを旨とする。作曲家はこの詞章に、慣れ親しんだ敬虔主義の本旨を見ていたに違いない。

このように、純英国産の『メサイア』にも実は、脈々とドイツの血、ハレの精神が流れている。そう考えるとハレ側も、女王のメッセージに一矢報いることができるはずだ。

（さわたに なつき・音楽評論家）